

[COMMUNION]

WEB:<http://www.nskk.org/tokyo/index.html>
E-mail:comm.tko@nsk.org
PHONE:03-3433-0987
FAX:03-3433-8678
Diocese Office



第36号

(通巻1271号)

2017年4月16日

編集：広報委員会

委員長：渡辺康弘

日本聖公会東京教区

港区芝公園 3-6-18

第128（定期）教区会開催



3月20日（月・春分の日）聖アンデレホールにおいて第128（定期）教区会が（教役者代議員及び信徒代議員約100名が出席）開催された。休養中の大畑主教に代わり管理主教である北関東教区の広田勝一主教が議長となり開会祈祷、開会演説をもって始められた。その中で「今から94年前の9月1日に発生した関東大震災の年の12月7日に、被災の免れた本郷の聖テモテ教会でジョン・マキム主教（監督）司式により元田作之進初代東京教区主教（監督）が誕生した。震災後マキム主教の『すべてのものは失われり、しかし信仰は残れり』の打電は新主教の誕生と共に教区、教会の復興の道を切り開いてきた。東京教区は困難な中から新たな道を切り開き今日に至っている。間もなく100年という区切りの年を迎えるにあたって、私たちが何をしていくべきか、神は私たちに何を求めているのか、神の心をしっかりと見極め、神を主体として、この変動の社会にあっても、変わらぬ真理を人々に指し示していく私たちの教区、教会でありたい。」と語られた。（広報委員会）

地域の課題と向き合う教会

現在、多くの教会が地域の課題や要請に対して様々な形で応えている。その中で特に今問題になっている課題、子どもの貧困や認知症などに関わっている教会を取材させていただき、現代社会が抱えている問題に教会がどのように向き合うか、皆さんと考えていきたい。

聖パウロ教会 『子ども食堂』

聖パウロ教会では毎月第1水曜日の18時から、「めぐる子ども場づくりを考える会（略称こどもば）」主催による子ども食堂を実施している。1食500円、子どもは無料。2016年5月の立ち上げから安定して50〜60人ほどの参加者を得て毎回ほぼ「完売」する。参加者の多くは親子連れ。会場である教会1階のガラス張りの開放的な集会室は、オープンしてすぐに遊び回る子ども達のはしゃぐ声とリラックスした様子のお母さん達（お父さんもちらほら）の話し声で賑やかになる。主として口コミで



知って参加される地元の方が多いが、公民館や児童館で教会名と地図が記載されたチラシを配



布しているため、1〜2駅離れた所からの参加者もある。スタッフは、リーダーの横山さん率いる「こどもば」メンバーと一

般のボランティアを含め20人ほど。保育士の横山さんをはじめ、栄養士や銀座の料理人といった豊富な人材を擁し、目黒区内の公民館でも月1回子ども食堂を運営している経験を活かして、高い品質のサービスを提供している。食材には地域の農家からの寄付も多く含まれ、有機栽培の米で作るおにぎりは特に人気が高い。

取材した日のメニューは雛祭りに近いということで五目ちらし。色鮮やかな80皿の五目ちらしは、和気あ

いあいとしたメンバーの雰囲気とあいまって、春を先取りする花のようだった。

聖パウロ教会からも信徒数名と牧師の下条司祭がボランティアとして参加している。主催は「こどもば」、聖パウロ教会は協力という立場であり、キリスト教色は下条司祭がオルガンコンサートでの宣伝をする程度。参加者は会場が教会であることに特に抵抗感はない。

スタッフも参加者も教会に来るのは初めてという方がほとんどである。スタッフからは、業務サイズの調理器具や広い調理場のおかげで、提供できるメニューの幅が広がったという声が聞かれた。また、子ども達やお母さん達が安心して楽しんで様子を見ると、月1回のこの子ども食堂が彼らにとっても貴重な空間になっていくだろうことは想像に難くない。信徒はそんな



年を対象の宣教の一部として開設したが、当初予定の3年後終了した。英語教育の専門性を要すること、後に2クラス各10名を1人で教える困難さに直面、また開設時に教役者・教会委員会の了解を得るも周囲の協力が得られなかったことも要因。これらの教訓は後継の活動に生かされている。

『アグネス「幼児クラブ」』

これからの社会・宣教のあり方を求めていた時、お向いの児童館に幼児を連れた母親たちの出入する姿に気付いた。2011年、教会ホールを週一回お母さんと幼児に解放することとした。子どもが遊べるキッズコーナーも設けたが、当初利用者は少なく、場所の提供だけではお母さんたちの助けにはならないと判り、児童館との明らかな差異を知り、再考を促した。1年半後には親子が一緒にできるプログラム「ヘクッキーやケーキ作り」を月1回・第4金曜午前中開催に改めた。口コミが効を奏し、時には親子12組、総勢22人にもなり、やや遠方からお子さん連れのお母さんもある。開会時には司祭が、キリスト教の内容も交えて、お母さんたちの日々の糧となるお話をして下さる。



信徒の奉仕は毎回6〜7人、クッキングの指導と子どもを遊ばせるなど大忙し。継続を期すため年間の計画・メニュー作りなど大変ながら、地域に住む方々の求めるところに応え、心配りしていきたい。なお「幼児クラブ」は教会主催を明言しているが、普段の礼拝にながめることは稀である。

『アグネス「こども食堂」』

2016年12月、毎月第2土曜日12時〜15時まで、幼児〜18歳まで無料、大人300円を柱に開設した。世間では子どもの貧困と個食、独居高齢者の同様の問題が浮上し、将に教会の社会奉仕が求められていると思いつき、司祭と教会委員に諮り、了承を得た。特に、下条司祭は浅草給食活動の経験を踏まえ、無用の迷いを払拭し、また聖パウロ教会でNPOが「こども食堂」の開設の時にあり、ノウハウに恵まれた。活動主体については、教会内の運営委員会主導ボランティアが望ましいとされ、採り

入れた。開設資金は教会の「宣教のための基金」から出資された。

運営委員6名は、当日のメニュー、スケジュール、ボランティアの配置買い出し、キッズコーナーの遊びを調整。現在、教会内外のボランティアは13名程、その他、友人や近隣住民のボランティアの登録がある。米や食材などの寄付要請も重要。又、教会隣接の牧師館には司祭ご夫妻が小学生のお子さまとお住いで、幸いにも学校や学童館・母親同士の情報の流れも良い。こうして社会と教会の関係は広がっていく。

3回の開催の平均来訪者は子ども25名、大人15名程。

3月に4回目の開催となり、次回に要する収益「プラス」の数字もあり、好調と言える。教会仲間には奉仕は出来なくとも食事に来ると300円の奉仕になります、と積極的に呼び掛ける。又、自然災害への多様な支援が求められる今日、下条司祭は「いつもやっていること、やった経験のあること以上のことは、いざというときにできるということはありません。大切な経験を積んでいこう」と言われる。この言葉を胸に活動を継続させることに努めた。

な宝物のような空間をいつでも自由に共有できる恵みを手にしている。

子ども食堂は、ここ目黒においては、忙しいお母さん達には息抜きの時間として、子ども達には居場所として機能している。子ども食堂の果たす役割は貧困や孤食対策に限られず、目黒では目黒なりの必要性に込める存在となっている。また、子ども食堂は教会にとって、自分達がどれほど大きな宝物を持っているかに気付けようとする機会とともに、社会が必要としているものをその宝物を使ってどのように提供できるか、という福音的センスを磨く信仰の実践の場となっている。

大森聖アグネス教会

20年程前、司牧司祭に「あなた方はカーテンを閉めて走っているバスと同じ、変わらなさい」と繰り返し返され、この言葉にこそ社会へ開かれた教会とは…と模索した原点がある、と信徒方々は口を揃える。2010年創立90周年を機に、神崎和子司祭率先による聖堂改修や教会改革は信徒をも変えていった。

『初期のアグネス「英語クラブ」』

この活動は2011年「楽しく英語を学ぶ」をモットーに小学校高学

聖マルコ教会 『市民と介護を考えるカフェ「オリーブの木」』

2014年7月から聖マルコ教会の新築と改修が始まり、翌年1月に礼拝堂とは別に「パリスシユホール」が完成した事がきっかけである。「これからの教会は市民へ開かれた教会として、市民活動に協力するべきだ。」と当時の牧師中村邦介司祭の呼び掛けに応じ、以前から構想していた市民向けの「カフェ」を企画した。

その後の試行錯誤

元は「認知症カフェ」のつもりだったが、企画発表時に対象を広げ、認知症だけではなく他の病気の方や健康な方もこられるような場がよいとの意見があった。従って対象者は市民、病気の方、支える家族テーマに興味の



ある方はどなたでも参加できる事にした。開催日は毎月第3日曜午後2時〜4時とし、主に医療、介護分野のテーマでゲストの話を聞いた後、数人のグループ毎にディスカッションする。各グループにはリーダーがいて話をまとめ、「カフェ」のように、お茶などしながら話し合い、最後に全体で共有し合う。

今まで行ってきたテーマ

「認知症を理解する(医師・以下カッコ内はゲストの意)」「喪失の悲しみを乗り越えるには?宗教を超えて語ろう!(浄土宗僧侶、牧師)」「よりよい死とは?QODについて(訪問看護師)」「お一人様の在宅介護(ライター)」「認知症と音楽(音楽家)」「笑いヨガ(府中市NPO学びのサロン)」「災害時の口腔ケア(歯科医師)」「子どもと貧困(練馬子ども食堂)」「認知症と貧困、地域でどう支えますか?(精神科医師)」など。

『チャリティーランチ』
2017年2月11日、聖マルコ教会でチャリティーランチが行われました。主催する「こどもの居場所作り@府中」は月1回、子どもたちに家庭的な食事を提供する

団体です。この団体に参加する教会信徒がいたこともあり、活動開始前の2016年2月にキックオフイベント「みんなでひな祭りを祝おう」の会場として会館を提供したのが聖マルコ教会でした。その後近隣の自治会館で毎月第4月曜日の17時から、大人300円、こども無料の食堂が続いています。



今回再びこの教会で、「見えない貧困」に苦しむ親子への「新入学、新学年応援チャリティーランチ」が行われたのです。食事作りに参加している方や、寄付で活動を応援するという方など、スタッフも合わせて50人以上が参加しました。

朝9時から集まった食事ボランティアの手で調理されたのは、ご飯の上にレタスサラダを載せ、その上に目玉焼き付きの大きなハン

バーグ。教会の大きなオーブンで焼かれ、紙製のランチボックスに入っていました。ババロアのデザートに飲み物付きでボリュームたっぷりです。大人千円、子ども500円の参加費から得られた収益は、新入学に伴う制服や定期代を補助するために使われます。



「こどもの居場所作り@府中」代表の南澤さんの司会で始まった会では、ピアノ演奏を楽しみながら食事をした後、府中市内で困窮する人達の現状や支援活動について、子どもに限らず、困窮する人への支援活動を行う女性性と市議会議員からの報告がありました。

教会委員会で議題として2回取り上げ、理解を得たが、今でも開かれた教会とはいえず、常時、信徒以外の方が教会におられるのは、決して軽いことではないとの考えがある。しかし、ボランティ



アが礼拝に出てくださるとがらりと変わる。運営・半年たち、4月から本格的に始動させたい。小学生1、2年生が中心、2時間のうち、前半は必ず勉強に集中し、後半の1時間は遊んでもよい。自分で考えるって楽しいなと思うようになるばと。

シリーズ 2017年1月

英国での学びを終えて

司祭 塚田 重太郎

私と家族は、1月の終り頃、3年3ヶ月ぶりに日本へ戻って来ました。私たち家族のことを覚え、折り支えてくださった兄弟姉妹に、心から感謝申し上げます。

アバディーン大学でPhD(Doctor of Philosophy)を取得するために、私は家族と共に2013年10月、スコットランド入りしました。キリスト教倫理コースの所属でしたが、研究を始めた当初、自分がキリスト教倫理やっているとは思っていませんでした。ただ、私のプ



2016年1月司祭授手を受ける(右から)アバディーン・オークニー教区主教ロバート・ギリース(当時)・本人・大畑喜道東京教区主教

ロジエクトが、スタンリー・ハワースという神学者の仕事に依拠しており、彼が「キリスト教倫理学者」ということになっているために、私もキリスト教倫理をやっていることになりました。余談ですが、ハワースは、2001年、タイム・

マガジンによって「アメリカ最高の神学者」に選ばれました。1年目に、自分がつく予定の教授が大学を去るという予想外のこともありました。神様は、私のプロジェクトにとって最高の指導者を備えてくださいました。研究生活の2年目から、私は2人の指導教授につくことになりました。1人はキリスト教倫理の領域における若手のトップ、ブライアン・ブロック、そしてもう1人は、ハワース本人でした。2人は私が何をやるうとしてくれるのかを理解し、適切な指導を与えてくれました。最高の指導者に恵まれ、2年目以降は研究生活で行き詰まるこ

場を提供するだけでも宗教という敷居の高さを低くすることができのかもしれない、そんな可能性を感じました。

目白聖公会 『学習塾』

きっかけ…日曜学校に近所の子供たちが増えていくことから、地域とのつながりをどうするか、スタッフと協議の末、日曜の午後、日曜学校の延長の形で、学校の勉強の手伝いをしてみよう。勉強、遊びと居場所づくりのために始めた。

また、教会のタレントを生かさないと思ふに申し訳ないとも思ふ、さらに、司祭の要望もあり宣教の一環として始めた。新しい方々が来られる時、淡水と海水が混じり合う時というか、教会を海水とすると、淡水魚として来られる方に、急には海水になじまないであろう。宗教色の少ない場所を設け、教師をするボランティアの方々を、宣教の対象とする試みでもある。

立ち上げの苦勞・信徒の理解…企画・準備の段階から、2015年春から同様の試みを始めている池袋聖公会で、支援のお手伝いをしながらノウハウを学んだ。

ともなく、順調に、論文の完成に漕ぎ着けることができました。

アバディーンでは聖ニニアン教会で教会生活を送りました。小さな会衆ですが、そこで30を超える国の人たちと出会い、共に同じ主を礼拝する喜びを味わいました。この小さな会衆に、私たち家族は愛され、支えられ、そして私は、この教会で執事・司祭授手を受けました。アバディーン・オークニー教区主教のボブは、私の研究に支障が出ないように配慮しつつ、教会でさまざまな働きを、自由にさせてくれました。



塚田重太郎司祭ご家族 塚田司祭・永遠君(長男)・証君(次男)・和代夫人(後列) 瑠里さん(長女)・真修君(三男)(前列)

経験とが、教会の成長に寄与することを願いつつ、報告とさせていただきます。(聖マーガレット教会牧師)

私たちの教会 [26]

ようこそ聖アンデレ教会へ



秋のバザー



こどもと祝うユーカリスト



現在の聖堂は、1996年に耐震・耐火補強目的とした改築工事をして献堂されました。竹田眞教区主教の司式、竹内謙太郎牧師説教でした。何故、芝のこの地であるのかは、アレクサンダー・クロフト・シヨウ師の日本伝道に始まります。英国福音伝播協会（SPG）の宣教師シヨウ師が英国より来日、三田の福沢邸に寄寓して宣教を始めました。が、三田の慶応大でなく、広く伝道する為1879年芝の地に聖アンデレ教会を建立しました。聖アンデレ教会は、シヨウ師の司牧のもとに発展し、1887年主教座聖堂として、全国の英国聖公会伝道の中心になったのが原点です。その後、大地震・空襲を経るも、先達の懸命の守りで再建発展してきました。土地名義は、戦後になってSPGより聖アンデレ教会に移し、英国の要請で、英語礼拝の為の聖堂を建てる申し出により、敷地内に聖オルバン教会が建てられました。

「子ども担当牧師」（会衆席の子どもに目を配り、踊りも交えて礼拝内容を噛み砕いて示す。子どもの洗礼式も司式）、音響映像・照明担当者など、主教の認可を受けた専任スタッフが働く。教会が変わったきっかけは10数年前、転入してきた新しい信徒と旧来の信徒とで教会再生チームを結成したことだという。近隣への聞き取りで「国教会は堅苦しく敷居が高い印象。素敵な食べ物や音楽がある、おしゃれな場所なら行きたい」との回答があり、それに応えた結果、現在では主日に3百人もの人々が集まる。



創立記念礼拝 - 6月第1主日

年婦人会により始められ、現在敷地内にあるボーイ・ガールスカウトも含めて、教会挙げて全員参加の行事です。教会主催で「教会にジャズが来た」の名のジャズコンサートも2001年から始められ、毎年近隣から遠方から来られます。これらの売上は全て、国境なき医師団や賛育会の医師等による被災地や難民支援活動、アジア学院をはじめ数多くの奉献先に捧げられます。奉献先との交流も行われています。

浅草聖ヨハネ教会の炊き出し活動は、毎週のご飯の提供と、第5週に弁当に詰めて聖アンデレ信徒達が浅草へ行きます。

特筆すべき礼拝は「こどもと祝うユーカリスト」で、主日9時15分よりこどもが主体となった礼拝を親子連れで参加出来ます。ここから若き教会委員が誕生して教会の原動力に育っています。聖餐式後の愛餐会は、設立後から戦時中を除き開催されており、グルーブ当番制で、カレー・シチュー・混ぜご飯などを作り、初めての聖餐式参加者には、食事券を差し上げて交流を深めます。

聖オルバン教会との合同聖餐式は、聖アンデレ日、聖オルバン日を中心に行われ、その後の愛餐会も交流を広げます。また昨年から渋谷聖公会聖ミカエル教会との協働も始まっています。

外に開かれていて、交流を深め、またバザーやコンサート等を通じて、広く社会に貢献しようとしてチャレンジする教会—それがアンデレ教会です。

（バルナバ 片岡大造）

シリーズ・宣教への取り組み①

ロンドンの下町ミニストリー（前編）

主日午前

9時半から

一昨年、昨年と真夏の2週間余をロンドンで過ごしました。教会音楽の学びが目的ですが、合間に出来るだけ多くの「町の教会」の礼拝に出席することに努めました。印象に残った例をご紹介します。

●15年前には閉鎖寸前だった教会が今や超満員に「シャドウエル聖パウロ教会」

テムズ河畔、かつて盛んだった造船業が廃れた後に病院や団地、学校が建てられた地域。教会は17世紀に建てられたが、今世紀初頭には平均礼拝出席者が高齢者12人程までに減少。そこから急激に回復し活気を取り戻したという新聞記事を見かけ、訪れてみた。



中島郁代 祈禱書による聖餐式。その後、聖堂後方で飲み物と軽食が供されるカフェタイムに引き続いて「コンテンポラリー礼拝」が昼夜2回行われている。バンドを率いて歌う「音楽牧師」のリードによる礼拝で、式文のほとんどの部分がメドレー曲になっていて、唱えるのは「主の祈り」ぐらい、バンドに合わせて歌っているうちに、自然と礼拝が進んでいるのである。説教と聖餐の箇所になると、司祭が真打ちのごとく壇上に現れる。



歌詞などは全て映写されるので、冊子類は必要ない。こうした礼拝は英国教会で珍しいものではなく、式文や音楽の素材も豊富に用意されており、そこから自由に選び、アレンジして構成しているそうである。他に、

●日曜日に礼拝するために教会があるわけじゃない？
「ル・ボウ教会ほかロンドンシティの教会」

「子ども担当牧師」（会衆席の子どもに目を配り、踊りも交えて礼拝内容を噛み砕いて示す。子どもの洗礼式も司式）、音響映像・照明担当者など、主教の認可を受けた専任スタッフが働く。教会が変わったきっかけは10数年前、転入してきた新しい信徒と旧来の信徒とで教会再生チームを結成したことだという。近隣への聞き取りで「国教会は堅苦しく敷居が高い印象。素敵な食べ物や音楽がある、おしゃれな場所なら行きたい」との回答があり、それに

「授業を各々選択し、移動して受ける形を取った。そこで訪れたいくつかの教会で、心底驚いた。平日に聖餐式を含む礼拝を必ず行い、日曜日は教会を閉じてしまうというのである。

例えばル・ボウ教会の場合、朝夕の礼拝に加えて、昼休みの時間帯に聖餐式が週2回、早朝と夕方の聖餐式が週1回ずつ、いずれも所要時間は30分未満。他に聖書研究会や黙想会も、出勤の時間帯に行われる。この教会の会衆とは都心地域の店舗や会社で働く人々であると、明確に意識していることが分かる。だから日曜日には、聖職者は都心の教会を閉じて住宅地にある教会に赴くのである。日曜にシティでの礼拝を望む人には、ごく近くにあるセントポール大聖堂ほか、主日礼拝を守る近隣教会を案内する。

また、ル・ボウ教会は地下礼拝堂を改装したカフェを1990年代から営業している。他の教会は「シティの教会グループ」を結成し、回り持ちで行うイベント、グッズ販売



講演会報告

社会とともにある教会

マラウイの聖公会から学ぶ

2017年1月28日聖テモテ教会にて開かれた講演会は、翌日の主日礼拝での説教と午後の講演からなる3部構成の1つです。

演者はマクドナルド・ニヤール・バンダ司祭。マラウイの司祭で、2010年アジア学院で学ばれ、一日母国で牧会等に従事した後、昨年4月から再びアジア学院の研究として働いておられる。前半はマラウイという国とマラウイの聖公会について、後半は社会の経済発展における聖公会の役割を話された。



自ら支援物資を運ぶ主教

り、学校、病院はもとより、特に遠隔地のインフラの整備、雇用など日々の暮らしを支えている。さらに、食品安全と健康を守るための持続可能な農業の推進

1889年から1964年までイギリスの植民地で、1964年に独立しマラウイ共和国となる。アフリカ大陸のタンザニアの南、モザンビークの西に位置している。人口は1750万人、最貧国の一つで、経済は農業が主体、一部は漁業

である。80%がキリスト教徒の多民族国家で、友好的な国民性や豊かな自然が特徴である。国が貧しいことにもよるが、農業の課題の中でも追い打ちをかけるのが、森林破壊と気候変動による干ばつと洪水である。食料不足が頻繁に起こり、貧しい社会・行政サービスとも相まって健康の維持が困難になりがちである。こうした社会に対する教会の取組みは多岐に渡

環境保全の大切さを学ぶ植林活動や事業の実施と、想像を超える働きである。

司祭は言われる、マラウイの教会は人々の精神的、物質的なニーズに応える総合的なミニストリーが不可欠である。日本の教会はそうした意識を持っているのか？日本社会に不可欠なミニストリーとは？

(広報委員会)



世界の聖公会 ニュース④ スーダン聖公会 発足

スーダンが全聖公会の39番目の管区として発足することになった。2011年の南スーダンの分離独立以降、スーダンと南スーダンの2カ国を1人の首座主教が監督していた。全聖公会事務局長ジョサイア大主教は「スーダンはイスラム教が支配的だが、信徒達は全世界の8千5百万人の家族の一員であることを実感するだろう」と述べた(2017年3月)。

南スーダン聖公会の女性の働きを国連で報告

南スーダン聖公会のハリエツト・ベイカ・ネイサン氏は、国連婦人の地位委員会(CSW)の会議において、内戦の続く南スーダンにおける女性と教会の働きについて報告した。「強姦や殺人と隣り合わせの極めて危険な森でも私たちは聖霊を身に付け大胆に難民キャンプへの食料援助を行った。かゆを炊く煙が立ちのぼり飢饉のキャンプに希望と命が戻った。」厳しい民族対立があったボル教区では和解の実現

編集後記

に女性が大きな役割を果たした。「妻と子どもについて来ない夫がいるでしょうか。まず妻同士が一つになれば、闘っていた男達も家族に連れられて徐々に一つになる。対立する部族間に平和と食料がもたらされる。」猛吹雪のため国連の全聖公会チームは会議日程を急遽変更せざるを得なかったにもかかわらず、ハリエツト氏の報告には60カ国に及ぶ使節が出席した(2017年3月)。

次回ペンテコステ号 6月4日発行予定

ちょっと聖書、ときどきユーモア (三十)

1. 機転

牧師の説教がクライマックスになるろうとした時、いままで寝ていた赤ちゃんの目が覚めて大きな声で泣き出した。申し訳なさそうにしている母親に牧師は機転をきかせて言った。

「みなさん、この赤ちゃんは私の説教を手伝ってくれました。これから皆さんに大事なことを伝えようと泣いて知らせてくれたのです。しかも寝ている人たちを起してくれました。」

2. 牧師不足で困るのは

信徒A「英語で礼拝をサービスっていうよね」

信徒B「そうだね」

信徒A「だから牧師不足で教会が困るのは何だと思う」

信徒B「さあ、なんだろう」

信徒A「教会のサービス低下だよ」

3. フレミアム?

信徒「先生、今日はいつもと比べてやけに説教が短くて、礼拝も早く終わりましたね」

牧師「今日は月の最後の日曜日だからね」

信徒「それとなんの関係があるんですか」

牧師「ですから教会も『プレミアムサンデー』として、いつもより早くみんなが帰れるようにしました」